

1992年度下半期報告

1. 個人山行（甲斐駒・黄蓮谷右俣）9月26～27日 参加・古田、古瀬

9月26日（曇のち雨）立川→長坂→竹宇駒ヶ岳神社 11:30→五合目 15:00

黒戸尾根は傾斜はそれほどではないがペースをつかめず苦しむ。夏合宿の時の半分の時間で五合目に着く。小屋は開放されていると思っていたが管理人と白くまのような犬がいて、犬は歓迎してくれたが管理人はしてくれなかった。雨の中、苔むした樹林の中で泣く泣くビバーク。

9月27日（晴れ）出発 5:30→黄蓮谷（遡行開始 6:30）→甲斐駒ヶ竹 13:10、発 13:30→五合目 14:50、発 15:20→横手駒ヶ岳神社 17:30→日野春 18:20→立川

朝外を見ると、木々の間から見えるガスの切れ目から秋の青空と白い甲斐駒の岩峰が見え、何だかそわそわする。今日は我々を含め3パーティ9人がこの沢に入った。案外傾斜はゆるく水も少ない。最初の8m滝、坊主の滝は巻いたが、後は直登できた。東に開けた明るい沢で、白い岩や、森の所々に浮かんだ赤や黄色の紅葉が美しい。15m滝は水流通しに失敗したが少し右から簡単に行ける。調子良く二股まで来ると、傾斜が格段に急になりナメが始まる。いわゆる核心部では左岸でビレイし、右岸にコースを取ったがとんでもなくつるつるして悪かった。後続パーティーが水流の中をたったか行ってしまったのを唾然として見た古瀬は、死ぬ思いでハーケンを回収し、水流通しに行くことにした。上に上がると古田さんは何も無かったような顔で迎えてくれた。インゼル手前のホールドの少ない10mほどの滝を登り次の滝を巻くと、奥の二股である。他パーティーは真ん中のブッシュを選んだが、我々は左へ行きベルグラの張った滝をトラバースして行った。時間は変わらなかった。この上はもう源頭の雰囲気、水が消え道がハッキリしてくる。周りがガスに包まれるころ頂上に着いた。

下りはまずレリーフを探しながら歩く。五合目でシュラフを回収しその後はダッシュで下る。コースは横手方面にとる。次第に雲も消え、夕焼けの八ヶ岳や鳳凰三山が清々しい。ところが神社に着くともうバスが無い。軽トラ、カーリーナとヒッチハイクで次いで何とか笛吹川まで来るが、ここから駅まで悪夢のようなつづら坂を登る羽目になり、二人とも途中で果ててしまった。死亡寸前でクラウンに乗った老夫婦に拾われて、生きて東京まで帰ることができた。有難うございました（文責 古瀬）。

2. 冬山偵察（爺ヶ岳東尾根～赤岩尾根）10月10～11日 参加・寺島、古瀬

10月9日 大町→鹿島

鹿島山荘で情報を聞いているうちに、おばあちゃんの昔話になってしまう。お茶、お菓子までだしてもらおう。

10月10日（曇り時々雨）鹿島発 6:00→東尾根主稜線 7:30→1978P 12:00→JP16:00
→頂上直下 16:30

墓場の裏から沢に入り、堰堤の上から右の尾根に入る。道ははっきりしている。ヤブこぎはなく主稜線に出る。ここからヤブこぎ開始で、微かについている踏み跡を辿ってゆく。ナイフエッジは高度感あるが1人がバランス良く歩けるくらいの幅はある。逆にJPまでのきつい登りがいやらしい。既にこのあたりには雪がついており、古い標識のあるJPから先は広く快適な雪稜である。夜になって完全に晴れ渡り、満月の下に白い山々が映し出され、下にはオレンジ色の大町の夜景が広がっていた。

10月11日（快晴後曇り）→爺ヶ岳主峰→南峰往復→冷乗越→高千穂平→大谷原→エコノミスト村→信濃大町

夜中非常に冷え込んで靴がかちかちに凍っている。頂上まではハイマツこぎもあったが1時間。

立山から鹿島槍にかけて新雪と紅葉が美しい。南尾根の様子をうかがいにアイゼンを着けて南峰を往復し、冷乗越に向かう。主峰から北峰、冷池にかけて大町側はガレて切れ落ちており、赤岩尾根の雪壁の下降は技術的に困難と判断し、本番では基本的に使わないこととする。しかし、難しそうなのは上部だけで、あとはダッシュで下る。エコノミスト村で、アルプスマラソンを完走された中島 OB、倉知 OB、西牟田 OB と落ち合って乾杯する。

3. 春山偵察前半（白峰三山） 11月1～3日 参加・寺島、澁沢、古瀬

10月31日 立川→甲府

11月1日 甲府→広河原 6:20(晴れ)→八本歯のコル 11:00→池山尾根上部往復 12:30→分岐 13:05 (ガス)→北岳山荘

八本歯のコル手前のハシゴの道が少しいやらしい。ここから寺島、古瀬が八本歯の偵察に行く。30分ほどで戻り北岳へ向かう。途中で用事のある古瀬と別れ、北岳の分岐でアイゼンをはき、山頂へ向かう。急な斜面のトラバースは中途半端に雪がついていていやらしい。澁沢はアイゼン歩きは初めてなこと、天気が悪くガスで先の様子が見えないことから途中で引き返すことにする。北岳山荘までは尾根の右側をトラバース気味に行くが、夏道がはっきりしていない上、きれ落ちた岩場なので春は危険そう。途中尾根がだだっ広くなっているところで山荘の方向が分からなくなった。ガスっているため視界が悪く、尾根筋がはっきりしていないので読図が難しい。強風にあおられ、一瞬ガスの切れ目に山荘を発見し、無事到着。

11月2日 出発 6:45 (快晴)→間ノ岳 8:45→農鳥岳 12:10→大門沢小屋 14:50

打って変わって快晴。朝日に映える富士山の雄姿を眺めつつ快適に雪面を踏む。道はだいたい尾根の西側で、危険な所もほとんど無い。小さなピークにだまされだまされ、ようやく間ノ岳に到着。空に向かって屹立する北岳が青空と見事なコントラストを成している。農鳥へは広い山頂から東に向かって下る。大変急でひどいガレ。ジグザグに広い斜面を降り、農鳥小屋に到着。既にかなり雪をかぶっている。西農鳥までは雪の深い急斜面が続き、ピッケルを一步一步刺しながら進む。西農鳥から農鳥までは地図で見るよりずっと長い。何度も上下を繰り返し、トラバースでは岩がところどころ雪に隠れていて緊張を強いられる。道はずっと右側を巻いて行く。やっと、という感じで農鳥に到着。晴れ上がった空は目に痛いほど。すぐそばに南アルプスの尾根が連なり、塩見岳へと続いている。一休みした後大門沢下降点へ下る。大門沢は急で滑りやすく、何度も尻もちをつく。高い木も無く、確かに雪崩れそう。石や木の根が斜面に飛び出た急な下りは歩きにくい。途中でアイゼンはずした後、後ろから来た登山者に触発されて寺島がスピードアップ、走るように大門沢小屋に着く。寺島は一気に下ることを考えたが澁沢が拒否。テントを設営する。

11月3日 (快晴) 出発 8:30→奈良田 10:35→身延

寝すぎて日が高くなってから起床。隣のパーティーの出発を食事をしながら見送る。奈良田までは途中何度も吊橋を渡る。沢は大きく凍結しそうも無いので雪の積もる時期に下るのは危険そうである。落ち葉の積もる道を上下し、バス停に着く。

4. 春山偵察後半（白峰南稜） 11月21～23日 参加・寺島、澁沢、古瀬

11月21日 (曇り) 奈良田発 9:00→大門沢小屋と下降点の間

小屋からしばらく上がった所に少し広い平らな場所があったのでこの日はここでテントを張ることとする。沢を下って水を取りに行った古瀬は「ひどい目にあった」らしい。

11月22日 出発 6:00→大門沢過下降点 8:20→広河内岳 9:30、発 9:50→白河内岳 11:45→黒河内

岳 14:00、発 14:25→2400m地点 16:45

下降点直下は雪が深くややラッセル。尾根上は風が強く天気は良いが寒い。尾根は広く歩きやすい。だらだらした行程が繰り返されるのでうっかりすると山頂を見落としそう。途中広い岩場(2813mから)に出てルートを迷うが左が楽。右に行った古瀬は遅れて合流。そこからすぐに樹林帯が始まり、ひどいハイマツ帯を抜けて黒河内岳に到着。目の前に塩見岳が青くそびえたっている。

しばらくまっすぐ東に下り、尾根をはずれたのでハイマツの猛烈なヤブこぎ。泳ぐようにして笹山尾根に出る。下草は少ないが立木や枝に阻まれて四苦八苦。途中わずかな平坦地をみつけてテント設営。寝苦しいが我慢。

11月23日(晴れ) 出発 6:10→2256m7:40→1344m9:50→奈良田 11:45

日の出と共に出発。朝焼けが美しい。再びヤブこぎ開始。小枝をかき分け、倒木を乗り越えひたすら進む。途中 2256m地点で思いがけず赤ペンキの標高点を見つけ喜ぶ。ここからは境界見出標と書かれた板の道案内役に助けられつつ下る。滑りやすい笹やぶを抜ける頃樹間からのダム姿とともに、はっきりした道も現れ、下界のにおいが強まる。しかし発電所の上で道を見失い行きつまる。下れる斜面を探すがどこも急でとても無理。結局発電所のパイプの横についている階段を下ることにする。途中所内に入って階段の手前から左に別れ、今にも分解しそうな梯子を伝って降りる。やっと地面に着いた時はまだ昼前。のんびり温泉に入る(文責 沢沢)。

5. 雪上訓練(富士山) 11月27~29日 参加・天羽(4)、寺島(3)、古瀬(2)、沢沢(1)

11月27日(金、晴れのち曇り) 富士吉田駅 07:00→滝沢林道途中 7:40→五合目佐藤小屋 9:30 発 10:30→吉田大沢 7.5合(雪上訓練) 11:45~15:30 →7合目

予定では前夜の内にタクシーで中の茶屋まで入ることになっていたが、某一名が集合時刻を一時間間違え、さらにはピッケルを部室に忘れて来たためにステーションビバーク。タクシーで馬返しまで行くことにする。が、運転士が馬返しまでの道を知らなかったために滝沢林道をかなり登ってしまった。佐藤小屋までタクシーと言うのはやはり気がとがめたので林道途中で降りる。結果、二時間弱の林道歩きで佐藤小屋。テントを設営し、不要な装備を中に入れてからテントをつぶして雪訓へ。この日は七合目の小屋わきでツェルトビバーク。

11月28日(土) 起床 6:00→吉田大沢 7.5合(雪上訓練) 8:00~12:45→五合目佐藤小屋 13:30

7時起床の予定だったが足の感覚がやばいような気がしたので自分は6時に起床。勝手に4人分のラーメンを作って、隣のツェルトの連中を起こす。この時、昨夜は誰も気付いていなかったのだが、一年沢沢だけはシュラフカバーを使用していなかったことが判明。沢沢は上級生に文句を付けたが、結局、上級生の話の聞いていなかった沢沢が悪いということ一件落着(?)。この日、午前中は吉田大沢で雪訓をメニュー通り行ったが、午後になり突風が吹き始めたので早めに佐藤小屋へ下山。週末ということで小屋のまわりはテントだらけ。夜、二つ隣のテントが失火。我々も消火を手伝った。

11月29日(日) 起床 5:00→出発 7:30→富士吉田駅 11:25

昨夜半から強い雨に加えて突風。朝起きたらテントの中はプールと化していた。登頂は断念して、小雨の中下山。途中から一転快晴となり、下山を早まったかなと思いつつも富士吉田駅へと歩いた(文責 寺島)。

6. 冬山(鹿島槍ヶ岳) 12月16~22日 参加・天羽、寺島、古瀬、沢沢

12月15日 立川→信濃大町→鹿島

大町に夜着く。バスから見た爺ヶ岳スキー場の不気味に赤いライティングが妙に気にかかる。

12月16日（晴れ時々雪） 出発 6:10→東尾根主稜線→1767m 14:45

妙な天気の中出発。いきなり、入るべき沢を見失い迷うがすぐ赤布を見つけことなきを得る。しかし雪が予想より多く、鹿島山荘で20cm、登り始めの1時間は急登で少なかったが、そのあとはずっとワカンをつけることになった。急登では雪の付き方が悪く、遅れがちな沢にザイルを出す。主稜線に出て、試しに沢にラッセルをやらせることになったが5分経っても目の前にいるので3人で「しょーがねーな」とけなしながら出発。時折雪がパラパラ舞うが風もなくしんとしている。天国から流れてくるようなサンアルピナススキー場のBGMと自分の息づかいしか聞こえない。雪が降って来て時間も無くなったところでテントを張った。結局1767mのピークまで来たことになり、まざまざ満足する。

12月17日（曇り） 出発 7:30→2000m付近 13:00

前日付けたトレースはうっすら残っていた。昨日と同程度のラッセルだがきつくなかったので沢にやってもらおう。だが体重40kgの沢のラッセルは体重70kgの我々にはほとんど意味がなかった。帰ってラッセル跡があることが疲労を増幅させるように感じる。誰に腹を立てるわけにもゆかないので黙っている。稜線は緩急を繰り返し、1978mと2150mの中間付近で泊まる。

12月18日（雪） 出発 7:20→トンガリピーク下→2050m付近 12:30

今日は核心部を通過するつもりで出発するが天候が微妙。トンガリピークの下での急登に取りつく。1段目を膝上ラッセルで越すと2段目は深く不安定な雪がついており、天羽がザイルを付けて必死のラッセル。雪は強くなり風も出てきた。ここはなんとか越してピッチを切れるところまで来たが雪の状態がひどい。目の前がピークであることは分かったが雪崩が怖いし、その先に幕営適地が無いので引き返すことに決定。

12月19日（快晴） 出発 9:20→トンガリピーク 12:30→2050m付近 16:00

夜中ずっと吹いていた風は明け方には止んだが、テントの外が薄暗く感じられたので何となく停滞ムードが漂う。ところが8時頃になって明るくなっていることに気付いて慌てて飛び出すと、強烈な日差しと照り返しがすごい。とにかく急いで出発する。昨日のトレースは消えていたが、不安定だった雪は風で飛ばされてしっかりしており、埋もれていた木が顔を出している。2段目とその上ではザイルを出す、快調にトンガリピークに達する。ここからアイゼンにはきかえる。不安だった脊せ尾根も雪が少なく（雪庇も無い）、思ったほど切れ落ちておらずあっけなかった。最後のギャップから先でザイルを使い、上の急登を一段上がった所で時間切れ。終日晴天、無風に恵まれ、右に鹿島槍、後ろに妙高、浅間を見ながらの行動は爽快だった。

12月20日（曇り） 出発 7:30→JP 9:20→2500m（ガス） 11:00

JPまで2時間で上がり、爺ヶ岳を越え冷池小屋まで行けるかと思ったがそう甘くはなかった。JPまでの急登は腰までのラッセルで、遅々として進まない。JPによりやく着いたが、この先はハイマツに足をとられさらに歩きにくい。足取り重く歩きつづけると強い風にガスと地吹雪が加わりさらにペースが落ちて行く。いよいよ本峰への登りにさしかかるところまで来たがこの調子では進むのは危険と判断、とりあえず風が弱まるまでツェルトで休む。しかし、風は弱まりそうもなくテントを出す。疲れていたが時間が有ったので、立派な壁やトイレを作って遊ぶ。

12月21日（快晴） 出発 7:10→爺ヶ岳主峰 8:25、発 8:35→冷乗越 10:00→鹿島槍頂上 13:00 発 13:30→冷池小屋 14:30

アタックは最高の天気だった。雲海の上に朝日が出て蓮華岳がモルゲンロートに輝き、その横には槍ヶ岳まで見えている。上がるにつれ蓮華が低くなっていくのが手に取るように分かる。その

内爺ヶ岳本峰と南峰の間に立山が見えてくるようになるとピークはもう間近で、アイゼンを聞かせて登りつめると剣が最後に姿を見せる。

主稜線には小さな雪庇ができていたので、黒部側にうっすら見える夏道の上に行く。明日以降天気が悪くなるという予想なので、注意して見ていると黒部の谷を埋め尽くしていた雲が少しづつ減っている。天気は今日いっぱい持ちそうだし、主稜線で閉じ込められたくないの、計画とは違うが思い切って今日中に赤岩尾根から降りてしまおうと言う案が出た。話し合った結果、冷乗越に余計な荷物を置いて頂上を往復し、時間が余れば下ることにする。おかげで最後の登りは荷物が軽くなり、ゴールが間近で気分も軽い、体の方は疲労がこたえて一步一步が重い。雪がほとんど無く夏道通しに行かなければならないのもうざったい。それでも最後は駆けるように登って頂上に立った。もう雲海はすっかり消え、北に目をやると五竜、白馬の向こうに水平線がくっきりと見えた。

帰路はさすがに緊張がゆるんでしまったが、何事もなく山荘に着く。結局、今日はここで泊まることにする。明日が下山、また古瀬の 20 歳の誕生日と言うことで豪華な夕飯のほかにお汁粉まで出てきた。明日の天気は気になるがそれはそれとして、リラックスと充実感の中、眠りに入る。

(なお、この日、布引岳付近で米軍か自衛隊の戦闘機が頭上わずか 10m を通過して行くと言う一幕があった)

12 月 22 日 (曇りのち時々晴れ) 出発 7:20→爺ヶ岳南峰 9:30→南尾根 J P→扇沢 (柏原新道登山口) 13:20→信濃大町→立川

昨日とは違って変わって黒い雲が垂れこめている。剣岳方面はまるで見えない。南峰ではガスに包まれて休む気にもならず、風に追い立てられるように南尾根を下る。この尾根は広いが J P まで見渡せるので安心である。途中で隣の東尾根に登っているパーティーを見つけた。どうも早稲田の山岳部らしい。手を振ってみたが通じたのだろうか。これから天気が荒れるようだが頑張っしてほしい。我々はほぼ安全圏内なので申し訳ないがもはや傍観者気分である。さて J P 付近でラッセルが有ったが最後のアルバイトと思って頑張り J P に着くと、眼下に最終目的地扇沢のターミナルが見えた。さすがに感慨深い。ここからは深雪の中を各自転げ落ちるように下って行く。爽快なこの下りも飽きた頃登山道に合流。途中雪崩の危険個所が何度も出てくるが、次第に雪が少なくなり最後に雪の無い車道に出てすべて終了。天羽さんにとっては部員としての活動の終了と言うことでお疲れ様でした。途中で車に乗せてもらって大町に着く。

予定よりペースは遅くなり、疑問に残る判断もあった。それでも去年の初めから部にいた者としては、去年の冬を振り返って、自分たちなりのやり方で何とかここまで来ることができた、着実な発展を確認したと言うのが実感である。我々の様なレベルにはほどよい充実感を与えてくれた山行だった (文責 古瀬)。

7. 文部省冬山研修会 (鋤崎山) 2 月 27 日～3 月 5 日 参加・古瀬

2 月 27 日 班のメンバーと顔合わせの後、山本一夫先生の講演、柳沢先生の講義と続く。眠気もぱっちり覚めるような面白いお話。言われていた通り飯はひどい。

2 月 28 日 我々の班の講師は熊崎先生となり、午後には早速スキーの練習。見るからに下手な人は 5, 6 人いる。もちろん自分もその内の一人。先生に再三注意を受けるが、身に着いた悪い癖は一朝一夕には治らない。それよりも他のメンバーのうまいこと。少なからずショックを受けた。

3 月 1 日 大雪の中、大日岳へ向け出発するが雪がさらにひどくなる。これではさすがに「雪崩の巣」人津谷には入れず、引き返すこととする。この下りがまた一苦勞で慣れない重荷にバランスがとれず、自分だけ転びまくって大幅に遅れをとる。研修所に帰ってからは当然練習である。

3 月 2 日 天候、積雪の状態が悪いため、目標を鋤崎山に変更する。粟巣野スキー場から入って

延々とラッセルを続け、大品山で幕営。途中導水管のトラバースや池ポチャしそうな急登が注意点。雪山で 50 人がずらっと並んでラッセルを待っているシーンはなかなかお目にかかれないものだった。

3 月 3 日 今日と同じように雪が降っている。鋏崎山へ向けブナ林の大斜面をラッセル。スキーだから腰までですんでいるが、ワカンならどこまで潜るか分らない。ナイフエッジにザイルを張って越したところで時間的に無理となり引き返す。下りは思い思いに滑って帰幕。

3 月 4 日 午前中はゾンデ棒やテレマウスを使っての雪崩搜索と、搬送訓練。晴れており遠くに大日岳が美しい。午後は雪洞掘り。5 人がかりで 2 時間費やした。この日は雪洞で寝るが、広すぎたのか寒くて眠れない。

3 月 5 日 最終日も晴れ。テントをたたんで班ごとに降りて行く。初めは単なるお荷物だった自分も、ある程度滑れるようになった。余った時間はグレンデで滑り研修所で解散。

プレ春合宿（八ヶ岳。阿弥陀北稜）3 月 10～14 日 参加・寺島、古瀬、沢沢（3 月 12 日に引地OB夫妻、斉藤OBが合流）

3 月 10 日 立川→茅野→美濃戸口→赤岳鉱泉

3 月 11 日（快晴）出発 6:30→北稜直下 9:50→阿弥陀岳 15:30→中岳コル 17:00→BC 17:35
天気が良く気持ちの良い朝。途中、少々雪の深いところがあり時間をとられる。北稜直下まですこし早く尾根に出ってしまったらしく、急な尾根をひたすら登る。岩稜間でのトラバースにザイルを一度張ったがそれほど問題はなかった。しっかりした木にアンカーをとり、1 ピッチ目のトップを古瀬がやることになった。正面の簡単なルートより右よりの斜面を選んだので少し怖い思いをしつつ通過。その上の雪の斜面は急でもろくいやすい。2 ピッチ目は寺島がリード。確保地点からすぐにトップが見えなくなり、声も届かないのでザイル操作がスムーズにいかない。途中で簡単なピレイを岩にとって二人目の沢沢がブルージックで中間の安定したテラスまで登る。ここから寺島が岩を直登。雪面を少しトラバースしハイマツに確保。この間かなりの時間がかかっていた。ほとんど飲まず食わずなので一同疲れた様子。しかし、核心部は終わったのでさすがにホッとす。頭上には頂上への雪面が大きくかぶさっている。ここでザイルを張るかどうか迷ったが、一年生の存在を考慮し、最初の急斜面にだけ張ることにした。雪面を越えると一気に視界が開け、見事なパノラマが出現。充足感も手伝って晴れ渡った空と傾きかけた日の光の下で、雪をいただいた山々の姿はこれまでに美しく見える。長い時間がかかっただけに感慨もひとしおである。

しかし、のんびりもしてられないのですぐに出発。下りもザイル 2 ピッチ使ったがほとんど危険は感じられなかった。雪崩に気を配りつつもザクザクと雪面を気持ちよく下り、あっけないほど早く赤岳鉱泉に到着。

3 月 12 日（雪）沈殿

泥のように眠る。午後引地OB夫妻、斉藤OBが到着。前日、あまりにも長く時間がかかったこと、ザイル 1 本ではリードが不安だが 2 本使うとパーティー 5 人となり、行動がさらに遅くなること等を考慮した結果、翌日はOB 2 人が石尊稜に登り、現役 3 人はお鉢周りをすることとした。

3 月 13 日（晴れ）起床 5:15、出発 7:00→中岳分岐 8:53→下山開始 11:00→BC 着 12:20、発 13:00→ジョウゴ沢→BC

赤岳に向かう途中前日の雪のためラッセルに苦勞する。稜線に近づくにつれ風が強くなってくる。中岳分岐まで来て、猛烈な突風を受け、頂上へ行くのは危険と判断。様子を見るために一時岩の

陰にツェルトをはる。寒さで凍りそうな手足を動かしながらひたすら風のおさまるのを待つが一向に好天の兆しが見えないので引き返す。下る途中も突風に襲われ数歩歩いては耐風姿勢とすることを繰り返し、短い距離がなかなか縮まらない。沢が手のしびれに音をあげる頃ようやく安全地帯に到着。

下界は嘘のようなおだやかさ。テン場でのんびり休憩した後、ジョウゴ沢で氷瀑をやってみようということになり出発。ハーケンを打つ練習をした後、寺島トップで全員が一通り登る。テン場に戻ってみるとちょうどOBのご帰環。「石尊の方は風はそれほど強くなかったが寒かった」とのこと。

3月14日（晴れ） 出発→大滝下 8:13→BC 10:30、発 11:05→美濃戸口 12:50

引地OB夫妻は硫黄岳の方へ行き、斉藤OBと現役はジョウゴ沢の奥にある大滝を登ってみることにする。滝の氷はハーケンを打つとすぐに割れ、なかなかランニングをとれず苦労する。寺島—古瀬、斉藤OB—沢のペアで登ることになったが、時間切れで寺島—古瀬で打ち切り。寒さに耐えきれず日向に避難した斉藤OBと沢のはのんびり見物。茅野でOBと別れ帰途につく（沢）。

8. 春合宿（白峰三山） 3月16～23日 参加・寺島、沢、古瀬

3月16日 立川→甲府

3月17日 甲府→夜叉神峠 7:42→鷲ノ住山登山口 8:10→吊り橋 10:50→池山尾根取り付き 11:45→池山御池 16:00

夜叉神峠に向かうタクシーの中で沢が篠竹を甲府駅に忘れて来たことに気付く。下山後に駅員に問い合わせたところ「無いね、ゴミと間違われたんじゃないの。」とのこと。

夜叉神峠からところどころ氷の張った道路を歩く。ザックの重圧に陰鬱になりがちな気分を、純白の衣を絹のように輝かせている山々が慰めてくれる。

鷲の住山の登りは岩の上をうっすらと雪がついていて滑りやすく何度も転びそうになりすぐにアイゼンをつけた。知らない内に山頂を過ぎ、急な斜面を下る。柔らかい新雪なのでアイゼンを付けていてもあまり役に立たない。何度も尻もちをつきながらやっと野呂川に降りる。長〜いトンネルを抜けていよいよ池山尾根へ。

いきなりジグザグの急登。雪はそれほど深くなく、膝下程度。1500mあたりから雪の付き方が不安定で急な登りが続く。すぐにアイゼンをつける。途中から雪が硬くなり、急な角度で足を置かねばならず、辛い。1900mあたりから、前日レポートを仕上げるために甲府駅で徹夜した沢がバテ始める。沢がフラフラになって小屋に着いた頃、古瀬は雪の降る中天気図をつけていた。この日は小屋の中にテントを張る。

3月18日（晴れ） 起床 5:20、出発 7:20→八本歯手前 13:30

しばらくだらだら緩斜面が続くが次第に傾斜がきつくなり、ひどいラッセルが始まる。三人しかいないのであつという間に順番が回ってくる。それでも、緩やかな尾根ではそれほど沈まないものでワカンを踏む感触が心地よい。

樹林帯を抜け、やっとワカンから解放された。一気に視界が開け爽快である。尾根筋がはっきりして迷うようなことはなく、危険も無いので、体力以外の問題は無かった。

八本歯のすぐ手前まで行く予定だったが、疲れていた上時間も無く、前のパーティーがテントを張った跡がきれいに残っていたので、八本歯まで一時間ほどの2822mあたりのなだらかな尾根上にテントを張った。雪を解かしている間に寺島が八本歯を偵察。時間が無かったため核心部は見られなかった。

3月19日（快晴後雪） 起床 4:00、出発 6:10→八本歯 6:50→八本歯のコル 10:30 北岳への分岐手

前 12:00→八本歯のコル 12:30→八本歯 14:00→テン場 14:30

八本歯の偵察もかねて北岳アタックを目指す。寺島リードでザイルを張る。切れ落ちた尾根の右側を慎重に雪を踏み固めながらゆく。途中ランニングをとれるような木が見つからず怖い思いをした。最後に 1 ピッチ懸垂下降が必要なところがあったが、どうしても良い支点が見つからず、また岩にハーケンが打てないのでやむを得ず古くて信頼できない残置ピンを利用した。体重をかけすぎないように慎重に降りてコルに到着。合計 3 ピッチ+1 懸垂下降。翌日のことを考えてしっかりした支点探しと雪を固めてのルート作りに力を入れたので予想以上に時間がかかった。コルからしばらくは脊せ尾根のわりにたっぷり雪がついていて足の付け根までのラッセル。不安定だがザイルを使うほどではない。

時間切れで北岳アタックは断念。頂上は次第に上昇してきた雲におおわれ、コルに引き返して来た頃から雪が降り始める。せっかくつけたトレースが・・・と苦々しい気分になる。

3 月 20 日 (晴れ) 起床 4:00、出発 6:10→八本歯 7:00→コル 8:30→北岳への分岐 9:40→北岳山頂 10:20→分岐 10:55→北岳山荘 13:00

大雲海を真紅に染めて昇る朝日を背に出発。北岳の偉容がくっきりと空に浮かび上がる。前日の雪でトレースはほぼ埋まってしまっていた。八本歯の直前で古瀬、沢がルートの間違え尾根の右をトラバース。ひどく不安定についた雪は崩れやすく、沢が足下で小雪崩を起こした。すぐに止まったが「死ぬほど怖かった」(こわばる沢)、下「下に灌木があったし、岩も出てないから大丈夫だと思った」(余裕の古瀬)、「・・・」(無関心の寺島)と反応は三者三様。

偵察のおかげで八本歯は何事も無く通過。日が高くなるにつれガスが上昇し山頂を覆ってしまう。分岐に荷物を置き北岳山頂へ。岩の間をクラスとした雪が埋め、ザイル無しでは下りは危険ではないかと進退を迷うが安全なルートを発見して解決。無事山頂に着くがあいにく視界はゼロ。

分岐から山荘までは途中良いルートが見つからずかなり手間取った。ガスで視界がきかないこともあり、岩の出た急な下りのある方向へ行くか、あるいは下のなだらかだがいやらしい雪面を巻くか、何度も往復して検討した。結局前者のルートに行くことしたが、ガスが切れて夏道の杭を発見、間違いの無いことを確認した。ザイルは使わなかった。

尾根筋が 2 つに分かれているところでルートを見失う。偵察の時と同じ過ちを繰り返してしまった。しかし、しばらく待てば必ずガスが切れるという教訓だけは実を結び、ガスの切れ目に山荘を発見、ようやく目的地に着いた。冬季小屋は広くて快適。中にテントを張った。

3 月 21 日 (晴れ) 起床 4:30、出発 6:40→中白根 7:10→間ノ岳 8:30→農鳥小屋 10:20→偵察発 12:00→西農鳥への稜線手前 14:00→テン場 14:50

間ノ岳まではひどい強風で顔が凍りそう。最後の登りはだだっ広い尾根ががちがちに凍っていてアイゼンのツアックがうまく刺さらないほどだった。

下りは嘘のように風が無い。視界も完璧なので軽快に下れそうだが、岩が出ている上に雪がついている斜面はもろくて雪崩そう。なかなかルートが決まらず、もどかしい。結局一度だけザイルを使って雪面を降りた。使わなくても大丈夫そうではあった。

農鳥小屋は完全に雪に埋まっていてなかなか場所が分らない。かなり尾根の左側に下って行ったところでようやく夏道とテントを張った跡を発見した。

農鳥小屋まで来て、西農鳥の登りのことも考え、ここで行動を打ち切ることにした。テントを張った後、寺島、古瀬が偵察に出発。西農鳥の登りにザイルを 2 ピッチ張った。

3 月 22 日 (晴れ) 起床 4:30、出発 6:30→岩稜取付 7:00→西農鳥 7:55→農鳥 8:45→大門沢下降点 9:40→白河内岳 12:25→黒河内岳 14:25

やはり風が強い。岩稜は残置を利用して 1 ピッチで通過。岩稜のすぐ上の雪面はやや急だが問題無し。稜線に出ると途端に風の強さが増す。息ができないのでとても辛い。やっと西農鳥に着いた時には顔がしびれていた。

農鳥まではルートどりに少し立ち止まることもあったが順調だった。ところどころいやな雪塊の

乗っこしや、足場の悪いガレなどもあったが、特に危険なところは無い。

大門沢下降点まで来たとき、ここから下ってしまおうかと古瀬が言い出す。主な山には登ってしまったのでもう十分と言う気分になったようだ。しかし、時間は十分にあるし、何より雪崩の危険がある、せっかくだから最後まで行こうと言うことになった。

偵察のときのようないどいヤブこぎはなく、快適に歩けたが、その代わり黒河内の登りではラッセルに苦しめられた。油断すると腰まで雪に埋まり、瀕死の虫の様にもがくことになる。黒河内はなだらかできれいに開けた最高のテン場を提供してくれた。風も無く、アルプスの主稜線が目の前に長大な体を横たえ見事なパノラマを展開している。

長かった合宿も何とか無事に終わりそうだと思うと達成感が胸にこみあげてくる。明日の温泉を楽しみにしつつ安らかな眠りにつく。

3月23日(晴れ) 起床 4:00、出発 6:05→2256m9:10→発電所 13:05

これからしばらくはこうして山の上から日の出を眺めることも無いのだろう、と名残惜しく太陽を眺めながら出発の準備をする。

樹林帯に入るとすぐにうんざりするようなラッセルが始まった。ワカンをはけば枝にひっかかって足をとられ、つぼ足では一歩ごとに体が沈む。それでも、葉が落ちて見晴らしが良くなり、偵察でルートを把握していたこともあって快調なペースで進んだ。赤布は雪に埋まっていたのかほとんど見当たらなかったが、読図がだいたい順調に行えたので道を外れることはなかった。熊の足跡らしきものを発見し、冗談半分に「何か歌え」などと言ったりする。幾重にも交錯する獣の足跡をたどるようにして、ほどなく見覚えのある笹藪に着いた。ここまで来るとすっかり春の陽気である。

滑りやすい道と最後の急斜面のため、沢のペースが落ちて来た頃発電所にでた。気を引き締めて狭い階段を慎重に下る。今度は直接発電所の敷地内に下ることにした。人目を気にしながら、鍵のかかった門を乗り越え、無事脱出。警備体制のいい加減さに感謝しつつ奈良田温泉に向かった。

見事に日焼けした顔を互いに笑い合う。日程的には決して長くはなかったが充実した合宿であった。何より天気にも恵まれたのが幸이었다。技術、判断力、体力など、それぞれに課題は残ったが確かな成功の手ごたえをもって1年間の締めくくりとなる山行きを終えることができた(文責 沢)。